

平成21年3月31日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2008

課題番号：19791740

研究課題名（和文）認知症高齢者のためのおだやかスケールの開発

研究課題名（英文）Development of a ODAYAKA scale for the elderly people with dementia

研究代表者

辻村 弘美 (TSUJIMURA HIROMI)

群馬大学・医学部・助教

研究者番号：70375541

研究成果の概要：

本研究の目的は、認知症高齢者のためのおだやかスケールを開発し、その使用の可能性を検討することである。おだやかスケールを構成する評価項目は、認知症の看護、介護経験者に、「認知症高齢者のおだやか像は…である」という自由記載の文章完成法の回答より抽出した。KJ法を参考にして分類し、認知症有識者による重みづけを行い、5領域48項目からなる「おだやかスケール原案」を作成した。その後、信頼性、妥当性を検証するために、「おだやかスケール原案」の他にQOL評価スケール（Alzheimer's Disease health-related quality of life: AD-HRQL）、行動感情評価スケール（Behavioral and Mood Disturbance Scale: BMD）の調査用紙を用い検討した。また、再テスト法も行った。20年度はさらに信頼性を高めるために、評価者間の一致率を算出、3領域20項目からなる最終版「おだやかスケール」を作成した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	120,000	1,220,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：認知症、高齢者、おだやか、尺度開発

1. 研究開始当初の背景

高齢者人口が増加する中、認知症高齢者も年々増加しており、2020年には約292万人に達すると予測されている。このような状況の中、現在の認知症ケアの方向性としては、これまでの旧い認知症ケアといわれる問題対処、あきらめのケアから、可能性、人間性指向

のケアに変わりつつあり、利用者本位のその人らしさを大切にするケアが求められている。

認知症ケアの臨床においては、認知症になってもおだやかに過ごす方やその状態によく遭遇する。研究者は、認知症高齢者のおだやかな様子が本人や介護者などの他者から

見ても良い状態であると考え、研究者は、おだやかさに関する研究をしたいと考えた。

本研究は、おだやかな認知症高齢者の生活背景の調査やその人の良さや強みとして臨床のケアプランの立案などに活用することができる考える。

2. 研究の目的

認知症高齢者のためのおだやかスケールを開発し、その使用の可能性を検討することである。

3. 研究の方法

(1) 「おだやかスケール原案」

①原案作成のための対象

本調査の対象は、認知症高齢者の看護・介護経験のある（認知症の家族を含む）61名とA県B市で認知症講演会に参加した者のうち協力の得られた46名の計107名を対象とした。また、質問紙の調査項目の精選（重み付け）に対しては、認知症有識者14名から回答を得た。

②原案作成のための方法

無記名自記式の自由記載の質問紙を用い、認知症高齢者のおだやか像を調査した。質問は、対象者がイメージする認知症高齢者のおだやか像について「認知症高齢者のおだやか像とは・・・である」という文章完成法にて記載を依頼し、一文一意味で、思いつくままに、できるだけ多く書くように回答を求めた。その他、回答者の属性として職種および性別、年齢、経験年数を尋ねた。

分析は、質問紙の認知症高齢者のおだやか像についての自由記載の部分には、KJ法の手法を参考にデータ分析を行った。ID番号をつけ、ラベルづくりをし、グループ編成、文章化した。グループ編成後の各グループの名前付けについては数名の研究者によって、集められた言葉の内容とグループ名の適合性を協議した。さらに各グループ名の内容妥当性と内容独立性を高めるために、グループ単位でのカードの一枚一枚を照合し、再検討した。

(2) 最終版「おだやかスケール」

①信頼性・妥当性の検証のための対象

介護老人福祉施設、介護老人保健施設、認知症対応型共同生活介護、通所介護・通所リハビリテーションを利用している65歳以上の認知症高齢者とした。

②信頼性・妥当性の検証のための方法

調査用紙は、「おだやかスケール原案」の他にQOL評価スケール(Alzheimer's Disease

health-related quality of life: AD-HRQL)、行動感情評価スケール(Behavioral and Mood Disturbance Scale: BMD)を用いた。対象者の調査を行うのは、対象者の日常生活の様子を把握している施設の看護職、介護職とした。

おだやかスケールの信頼性、妥当性を検証するために、行動感情評価スケールとQOL評価スケールの関連を分析した。また、信頼性の検討では、再現性(回答者内一致率)について検討するために再テスト法を実施した。さらに、調査項目の内的整合性を検討するため、Chronbachの α 係数を算出した。解析には、統計パッケージSPSS11.0Jを使用した。

20年度は、さらに信頼性を高めるために、評価者間の一致率を調査した。

4. 研究成果

(1) 「おだやかスケール原案」

①対象

対象者の属性は、介護職が約半数、看護職が約17%を占めており、年齢は 41.9 ± 13.2 歳、認知症に関わる看護・介護経験年数は 7.6 ± 6.3 年であった。

②結果

質問紙調査にて、認知症高齢者のおだやか像について858文章を得たが、この中から質問にかなっていない回答の166文章を除いた、692文章を、分類した。最終的には、「社会的交流」、「その人らしさ」、「活動の楽しみ」、「自分の力の発揮」、「安心・快」の5領域56項目に分類された。その後、14名の認知症有識者に56項目それぞれについて重要度を評価してもらい、各項目の平均値と標準偏差を算出した。その後、最低レベルである平均値1.5以下の7項目を中心に再検討した。その結果、以上により、社会的交流12項目、その人らしさ13項目、活動の楽しみ6項目、自分の力の発揮6項目、安心・快11項目の5領域48項目から構成される認知症高齢者のおだやかスケール原案を作成した。

(2) 最終版「おだやかスケール」

①対象(19年)

介護老人保健施設45名、介護老人福祉施設23名、認知症対応型共同生活介護15名、通所介護(通所リハビリテーション)39名の計122名で、男性36名、女性85名、不明1名であった。平均年齢は 83.9 ± 7.1 歳、要介護度は要介護3が最も多く約30%で、痴呆度は中等度と高度が多く両者ともに約30%であった。実際に調査を担当する施設のスタッフの職種は、看護職10名、介護職49名、相談職1名、不明2名の計62名であり、介護

職が約80%であった。また、性別は男性15名、女性47名であった。平均年齢は36.2±12.3歳、認知症に関わる看護・介護の平均経験年数5.7±4.3年であった。

②対象 (20年)

高齢者ケア施設に入居中の認知症高齢者39名、平均年齢は84.4歳、男女内訳は男性6名、女性33名、介護度の平均は2.7であった。また、認知症高齢者の生活の状況を調査した施設のスタッフは計51名で、介護職が9割以上を占めており、平均経験年数は5.1年であった。

③結果 (19年)

おだやかスケールとQOL評価スケールとの相関係数は0.79で、有意な強い相関がみられた。

おだやかスケールの下位尺度とQOL評価スケールの相関係数では、おだやかスケールの「周囲との交流」と「満足、活気」はAD-HRQL-Jと有意な強い相関がみられ、相関係数はそれぞれ、0.75、0.73であった。おだやかスケールの「自分らしさの発揮」と「活動の楽しみ」とAD-HRQL-Jの相関係数はそれぞれ、0.60、0.63で、有意な中程度の相関がみられた。

おだやかスケールの下位尺度とAD-HRQL-Jの下位尺度のそれぞれについて、相関係数を求めたところ、最も高かったものは、おだやかスケールの「周囲との交流」とAD-HRQL-Jの「社会的交流」が0.72、おだやかスケールの「活動の楽しみ」とAD-HRQL-Jの「活動の楽しみ」が0.72であり、有意な強い相関がみられた。また、有意な中程度の相関がみられたものは、おだやかスケールの「周囲との交流」とAD-HRQL-Jの「自己の認識」が0.66、「活動の楽しみ」が0.59、「感情と気分」が0.47、おだやかスケールの「自分らしさの発揮」と、AD-HRQL-Jの「社会的交流」が0.53、「自己の認識」が0.66、「活動の楽しみ」が0.65、おだやかスケールの「満足、活気」と、AD-HRQL-Jの「社会的交流」が0.54、「自己の認識」が0.51、「活動の楽しみ」が0.61、「感情と気分」が0.63、「周囲との関係」が0.50、おだやかスケールの「活動の楽しみ」と、AD-HRQL-Jの「社会的交流」が0.48、「自己の認識」が0.50であった。

おだやかスケールの「周囲との交流」とAD-HRQL-Jの「周囲との関係」では、相関係数は0.19で、ほとんど相関がみられなかった。

おだやかスケールと行動感情障害評価スケールとの相関では、おだやかスケール全体とBMDスケール全体の相関係数は-0.74で、有意な強い負の相関がみられた。

また、おだやかスケールの下位尺度とBMDスケールとの相関係数は、「周囲との交流」

とBMDスケールでは-0.64、「自分らしさの発揮」とBMDスケールでは-0.62、「満足、活気」とBMDスケールでは-0.73、「活動の楽しみ」とBMDスケールでは-0.63であった。おだやかスケールの「満足、活気」とBMDスケールでは有意な強い負の相関がみられ、その他は、有意な中程度の負の相関がみられた。

おだやかスケールと要介護度、痴呆度の相関係数は、それぞれ-0.44、-0.68であり、おだやかスケールと痴呆度の間には、有意な中程度の負の相関がみられた。

信頼性では、2週間後の再テスト法による調査については、1回目のおだやかスケールの平均総合得点は、75満点中で36.21±16.12、2回目のおだやかスケールの平均総合得点は、75満点中で37.74±16.75であった。1回目と2回目の再テスト法による相関係数は0.97で、有意な強い相関がみられた。

内的整合性については、おだやかスケール全体のChronbach α 係数は、0.96であった。各領域の α 係数は「周囲との交流」が0.92、「自分らしさの発揮」が0.90、「満足・活気」が0.86、「活動の楽しみ」が0.89であり、内的整合性は支持された。

④結果 (20年)

24の質問項目ごとの一致度は、30.8%から63.2%であった。これらの結果から一致率が30%代と低い質問項目について、高齢者看護に精通した研究者よりスーパーバイズを受けながら、その内容と表現方法について検討した。内容と表現方法については、認知症のパーソンセンタードケアの著者であるTom Kitwoodの提唱するwell-beingを参考にした。その結果、「周囲との交流」の【食事を楽しみ和やかに摂取する】、「満足・活気」の【生き生きしている】、【満足している、満たされているように見える】、【何か楽しめることがある】の4項目を削除し、well-beingの内容を取り入れながら、その他、抽象的な表現をできるだけ客観的に測定しやすい表現にして3領域20項目の最終版「おだやかスケール」を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 3件)

- ① 辻村弘美、認知症高齢者のおだやかスケールの開発、ぐんま認知症アカデミー 第2回秋の研究発表会、平成19年12月2日、前橋市群馬会館
- ② 辻村弘美、小泉美佐子、認知症高齢者のおだやかスケールの開発、日本老年看護

学会第12回学術集会、平成19年11月11日、神戸国際会議場

- ③ 小泉美佐子、辻村弘美、認知症高齢者のおだやかスケールの開発－認知症QOLスケールと行動感情障害スケールとの関連、第8回日本認知症ケア学会、平成19年10月12日、盛岡市マリオス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻村 弘美 (TSUJIMURA HIROMI)

群馬大学・医学部・助教

研究者番号：70375541

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者